

科目分類	専門科目 環境	対象学年	2・3・4
授業科目	環境政策論	学期	前期授業
担当教員	沖村 理史	選択／必修	選択
科目コード	H038030	授業形態	講義
		単位数	2

その他	※1 ※2
-----	----------

授業の概要	<p>20世紀にグローバルな規模で発展した市場経済は、同時にさまざまな形での環境問題をもたらした。21世紀は環境の時代と呼ばれているが、その環境問題の構造と本質を探ると現代の社会経済システム(大量生産・大量消費・大量廃棄型社会)が抱える諸問題が明らかになる。本講義の目的は、以下の三点である。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現実に展開している環境問題の現状の把握とそれをとらえる視点の理解 ・さまざまな側面の相互関連を自ら考える作業 ・自ら考える作業を通じて出てきた問題点・意見の交換 <p>【到達目標】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 環境問題に関する基礎知識と環境問題の構造に関する基本的な概念を説明できる 2) 環境政策に関する基本的な原理を説明できる 3) 環境問題と環境政策の諸側面の相互関連を自ら考え、分析的に思考・表現することができる
-------	---

授業の内容	<p>I. イントロダクション／環境問題をめぐるさまざまな視点</p> <p>第1回 イントロダクション／大量生産・大量消費・大量廃棄型社会</p> <p>第2回 視点(1) 環境と資源</p> <p>第3回 視点(2) 廃棄物と環境</p> <p>第4回 視点(3) 持続可能な発展</p> <p>II. 環境問題</p> <p>第5回 環境問題(1) 自然保護問題</p> <p>第6回 環境問題(2) 水質汚染問題</p> <p>第7回 環境問題(3) 大気汚染問題</p> <p>第8回 環境問題(4) エネルギーと環境／放射性廃棄物問題</p> <p>第9回 環境問題(5) 廃棄物問題</p> <p>第10回 環境問題(6) 循環型社会</p> <p>III. 環境政策</p> <p>第11回 環境政策(1) 環境政策のライフサイクル、国家の取り組み：規制</p> <p>第12回 環境政策(2) 国家の取り組み：経済的手法</p> <p>第13回 環境政策(3) 国家の取り組み：その他の手法</p> <p>第14回 環境政策(4) 社会の取り組み</p> <p>IV. まとめ</p> <p>第15回 今日の環境政策の課題</p>
-------	--

テキスト	特になし、配布プリントに基づき講義する。
------	----------------------

参考文献	<p>東京商工会議所編著『改訂6版 eco検定公式テキスト』日本能率協会マネジメントセンター、2017年。</p> <p>交告尚史ほか『環境法入門 第3版』有斐閣アルマ、有斐閣、2015年。</p> <p>倉阪秀史『環境政策論 第3版』信山社、2015年。</p> <p>鷲田豊明、笹尾俊明編『循環型社会をつくる』岩波書店、2015年。</p> <p>新澤秀則、森俊介編『エネルギー転換をどう進めるか』岩波書店、2015年。</p> <p>大沼あゆみ、岸本充生編『汚染とリスクを制御する』岩波書店、2015年。</p> <p>鷲田豊明、青柳みどり編『環境を担う人と組織』岩波書店、2015年。</p> <p>OECD編『第3次OECDレポート 日本の環境政策』中央法規、2011年。</p> <p>除本理史、大島堅一、上園昌武『環境の政治経済学』ミネルヴァ書房、2010年。</p> <p>勝田悟『環境政策』中央経済社、2010年。</p>
------	--

評価方法	出席(約30%)、試験(約70%)で評価する。試験は試験期間中に実施する。
------	---------------------------------------

科目分類	専門科目	対象学年	2・3・4
授業科目	環境関係法	学期	後期授業
担当教員	岩本 浩史	選択／必修	選択必修
科目コード	H038040	授業形態	講義
		単位数	2

授業の概要	<p>本講義は、まず、わが国における環境保護に関する現行法制度を概観することに重点を置く。講義対象は、国内環境問題に関する法制度に限定する(したがって、地球温暖化、オゾン層の破壊、酸性雨等の地球環境問題・国際環境問題は扱わない)。その上で、環境問題に対処するために現行法制度の(あるいは現在の環境法学の)どこに問題があるのか、どこをどのように改めれば良いのか、を考えたい。</p> <p>なお、講義担当者の専門が行政法であるため、本講義は主として行政法学的アプローチにより進められる。したがって、行政法Ⅰをすでに受講していること、および行政法Ⅱを受講することが望ましい。</p> <p>【到達目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・環境法の基礎的な概念・理論・法制度を自己の言葉で説明できる。 ・環境法に関する基本的な問題について論理的に思考・表現することができる。
-------	--

授業の内容	<p>第1週 インTRODクシヨン 環境及び環境法の概念、環境法の体系、民事法・刑事法・行政法の特徴について解説する。</p> <p>第2週 環境法の基本原則(1) 持続可能な発展原則、並びに未然防止原則及び予防原則について解説する。</p> <p>第3週 環境法の基本原則(2) 汚染者負担原則とその他の費用負担の考え方について解説する。</p> <p>第4週 環境法の基本原則(3) 環境権及び自然の権利について解説する。</p> <p>第5週 環境アセスメント(1) 環境アセスメントの概念、意義及び展開を説明した後、環境影響評価法の概要を解説する(実施主体、実施時期、対象事業)。</p> <p>第6週 環境アセスメント(2) 引き続き、環境影響評価法の概要を解説する(手続の流れ、代替案の検討、市民参加)。</p> <p>第7週 自然保護に関する法(1) 自然公園法及び自然環境保全法の概要を解説する。</p> <p>第8週 自然保護に関する法(2) 鳥獣保護管理法及び文化財保護法(天然記念物制度)の概要を解説する。</p> <p>第9週 自然保護に関する法(3) 種の保存法の概要を解説する。</p> <p>第10週 廃棄物・リサイクルに関する法(1) 廃棄物問題の概要について説明した後、廃棄物処理法の概要を解説する(目的、廃棄物の概念、廃棄物の種類)。</p> <p>第11週 廃棄物・リサイクルに関する法(2) 引き続き、廃棄物処理法の概要を解説する(廃棄物の処理責任、廃棄物処理業の規制、廃棄物処理施設の規制、不法投棄・不適正処理対策)。</p> <p>第12週 廃棄物・リサイクルに関する法(3) 拡大生産者責任の考え方を説明したのち、容器包装リサイクル法と家電リサイクル法の概要を解説する。</p> <p>第13週 公害規制に関する法(1) 大気汚染防止法及び自動車に由来する大気汚染に関する法の概要について解説する。</p> <p>第14週 公害規制に関する法(2) 水質汚濁防止法の概要について解説する。</p> <p>第15週 公害規制に関する法(3) 土壌汚染対策法の概要について解説する。</p>
-------	--

* 授業の進度については、シラバスと異なる場合がある。

テキスト	交告尚史ほか『環境法入門(第3版)』(有斐閣、2015年)を教材として用いる。その他、講義プリントを配布する。
------	---

参考文献	阿部泰隆・淡路剛久(編)『環境法(第4版)』(有斐閣、2011年) 大塚直『環境法(第3版)』(有斐閣、2010年) 北村喜宣『環境法(第3版)』(弘文堂、2015年) その他の参考文献は講義中適宜指示する。
------	---

評価方法	学期末試験(100%)によって成績評価を行う。
------	-------------------------

その他	※1 ※2
-----	----------

科目分類	専門科目 環境	対象学年	2・3・4
授業科目	環境文化論	学期	前期授業
担当教員	八田 典子	選択／必修	選択必修
科目コード	H038050	授業形態	講義
		単位数	2

授業の概要	<p>本講義では、環境と文化の関わりを多角的に検証し、環境と深く結びついて存在する多様な文化的所産を取り上げて、その魅力と重要性について考察していく。</p> <p>具体的には、以下の6つのキーワードを掲げ、主に日本と西洋の事例に注目しながら、「環境文化」のあり方とその意義についての理解を深めていく。</p> <p>「景観」のテーマでは、島根県における課題や取り組み状況にも注目する。</p> <p>自然観 風景画 庭園 景観 世界遺産 町づくり</p> <p>【到達目標】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「環境文化」に関する基礎的な知識・概念を自己の言葉で説明できる。 ・「環境文化」に関する諸問題について、論理的・分析的に思考し、自己の言葉で説明できる。 ・現代社会における「環境文化」の意義について、論理的・分析的に思考し、自らの考えを文章等で表現することができる。
-------	--

授業の内容	<p>第1回 イントロダクションー環境文化とはー</p> <p>第2回～第3回 自然と人間・自然と文化ー日本と西洋の「自然観」に注目してー</p> <p>第4回 自然描写の変遷ー日本と西洋の「風景画」に注目してー</p> <p>第5回～第6回 環境文化としての「庭園」</p> <p>「庭園」は、自然を素材とした人為的な創造空間であり、代表的な「環境文化」である。日本とヨーロッパの事例を比較しながら、それぞれの特色と魅力、そこに表現された人々の自然観等を考察する。</p> <p>第7回 環境保全の理念と実際ー「文化」の視点からー</p> <p>日本における「歴史的環境」保存運動の展開や、「ナショナルトラスト」の活動に注目し、環境の文化的側面が持つ重要性について学ぶ。</p> <p>第8回～第10回 環境文化としての「景観」ーその価値に気づき今後を考えるためにー</p> <p>景観の優劣は、単に視覚的なレベルにとどまらず、住民の心理や生活の質、地域の文化度に大に関わる問題であることを認識する。景観もまた文化であり、景観美の保持と創出には、歴史性や人間性も含めた地域環境が有する特性への配慮が不可欠である。日欧の代表的な景観や「重要伝統的建造物群保存地区」「しまね景観賞」等の取り組みから具体的な事例を挙げて景観美の価値を確認することを通して、知識を得るとともに、住民として、また、プランナーとして、魅力的な地域環境を形成するために必要な意識と感覚を養いたい。</p> <p>第11回～第12回 「世界遺産」の理念と諸相ー環境文化の視点からー</p> <p>環境文化の視点から、「世界遺産」の理念と歴史、現状を確認し、その意義とともに、今後に向けての課題を検証する。</p> <p>第13回～第14回 地域特性を活かした町づくりー環境文化の視点からー</p> <p>小布施町(長野県)等の取り組みを具体的な事例として挙げながら、地域の自然や歴史的・文化的特性に配慮し、それらを活かした町づくりの魅力について考える。</p>
-------	---

	第15回 まとめー環境文化の魅力と意義ー
テキスト	特定のテキストは使用せず、レジュメと複数の文献をもとに作成した資料を配付して、教材とする。映像資料も適時活用する。
参考文献	適宜紹介する。
評価方法	授業中に書くコメント等(20%)、出席状況等による平常点(15%)、試験(65%)により、総合的に評価する。 ※ 出席回数が3分の2に満たない者は、成績評価対象者となることができない。
その他	※1 ※2

科目分類	専門科目	対象学年	2・3・4
授業科目	環境経済学	学期	後期授業
担当教員	豊田 知世	選択／必修	選択必修
科目コード	H036220	授業形態	講義
		単位数	2

授業の概要 環境経済学は、環境問題を経済学の視点から考える学問です。環境問題は、私たちの身近な地域的な問題から地球規模で考えなければならない問題まで、複数の分野にまたがった幅広い問題です。本講義では、なぜ環境問題が発生するのか、なぜ環境対策が必要なのか、ということを経済学の視点から学びつつ、環境問題の評価手法や、環境問題解決のための経済学的手法について理解することを目的とします。

【到達目標】

- ・環境問題発生メカニズムを自己の言葉で説明できる。
- ・環境問題を分析するための経済学の基礎知識を自己の言葉で説明できる。

授業の内容	第1回 イントロダクション 第2回 経済学のメカニズムと環境の関係 第3回 環境問題発生メカニズム：外部性 第4回 環境問題発生メカニズム：公共財とフリーライダー 第5回 環境の評価手法：顕示選好法と表明選好法 第6回 環境の評価手法：費用便益分析 第7回 環境の評価手法：エコジカル経済学 第8回 中間まとめ 第9回 環境政策の理論：直接規制 第10回 環境政策の理論：環境税と補助金 第11回 環境政策の理論：直接交渉と排出量取引 第12回 環境政策への応用 第13回 企業と環境問題 第14回 地球環境問題 第15回 講義のまとめ
--------------	--

テキスト 教科書は特に指定しません。授業のレジュメを配布します。

参考文献 栗山浩一・馬奈木俊介『環境経済学をつかむ』、有斐閣、2008年。
日引聡・有村 俊秀『入門 環境経済学—環境問題解決へのアプローチ』、中公新書、2002年。

評価方法 少なくとも3分の2以上出席していることが単位取得の条件とします。
成績は、期末試験60%、小テスト30%、平常点10%で評価します。

その他
※1
※2

科目分類	専門科目	対象学年	3・4
授業科目	国際環境政治学	学期	後期授業
担当教員	沖村 理史	選択／必修	選択必修
科目コード	H038060	授業形態	講義
		単位数	2

授業の概要 国際的な環境問題は、21世紀の国際社会が抱えるグローバル・イシューの主要な一つである。本講義では、主に地球環境問題とグローバル・ガバナンスに焦点をあて、個々の内容に踏み込み事例を検討する。具体的には、国際的な環境問題が社会化するプロセスとして重要な国際環境会議と、政策手段として重要な国際環境条約をとりあげ、意義と交渉過程を検討する。本講義の目的は以下の三点である。

- ・現実に展開している地球環境問題の現状の把握とそれをとらえる視点の理解
- ・政策決定に当たり、直面するさまざまな側面の相互関連を自ら考える作業
- ・自ら考える作業を通じて出てきた問題点・意見の交換

【到達目標】

- 1) 国際的な環境問題に関する現状を理解し、基礎知識を説明できる
- 2) 国際的な環境問題への対応に関する基礎知識、基本原理、基本原則を説明できる
- 3) 国際的な環境問題の諸側面の相互関連を自ら考え、分析的に思考・表現することができる

授業の内容	I. イントロダクション／地球環境問題 第1回 ガイダンス／イントロダクション 第2回 環境と開発 第3回 発展途上国と持続可能な発展 第4回 国際環境会議と国際環境条約の意義 II. 国際環境会議 第5回 国際環境会議(1) 国連人間環境会議(1972)と国連環境開発会議(1992) 第6回 国際環境会議(2) ヨハネスブルグ・サミット(2002) 第7回 国際環境会議(3) Rio+20会議(2012) III. 国際環境条約 第8回 国際環境条約(1) 越境大気汚染(前編) 長距離越境大気汚染条約 第9回 国際環境条約(2) 越境大気汚染(後編) 大気汚染防止議定書 第10回 国際環境条約(3) オゾン層保護(前編) ウィーン条約 第11回 国際環境条約(4) オゾン層保護(後編) モントリオール議定書 第12回 国際環境条約(5) 気候変動(前編) 気候変動枠組条約 第13回 国際環境条約(6) 気候変動(中編) 京都議定書 第14回 国際環境条約(7) 気候変動(後編) パリ協定 IV. まとめ 第15回 地球環境問題をめぐる国際環境政治学の課題
--------------	---

テキスト 特になし、配布プリントに基づき講義する。

参考文献 亀山康子・馬奈木俊介編『グローバル社会は持続可能か』岩波書店、2015年。
新澤秀則、高村ゆかり編『気候変動政策のダイナミズム』岩波書店、2015年。
川名英之『世界の環境問題〈第1-11巻〉』緑風出版、2005-15年。
The World Bank『人と経済の世界地図 社会・環境政策から開発支援まで』丸善、2009年。
窪田順平編『モノの越境と地球環境問題—グローバル化時代の〈知産知消〉』昭和堂、2009年。

評価方法 出席(約30%)、試験(約70%)で評価する。試験は試験期間中に実施する。

その他
※1
※2